日本医史学雑誌第四十一巻第三号
平成七年九月二十日発行
平成七年三月二十五日受付
平成七年五月二十五日受理

海軍大医監　奥山虎炳（一八四〇―一九二六）

深瀬泰旦

はじめに

明治初年に海軍大医監として海軍軍医部の創立とその運営に力をつくした奥山虎炳については、諸書に散見される程度のとぼしい史料しか目にすることができず、これにふれた論文は存在していない。

私は奥山虎炳の孫にあたる奥山虎二氏から奥山氏系図を披見する機会をあたえられ、諸書に散見される史料を渉猟し、奥山虎炳の生涯の一斑をあきらかにすることができたので、ここに報告する。

その出自

奥山氏系図にみる虎炳の記述はつぎのようなものである。

虎炳（トラアキラ）、元仲ノ長男、肥前長崎ニ生ル、母ハ福島篤子、慶応年間旧政府ヨリ擢レテ陸軍医官トナリ富士見宝蔵番格トナリ二拾人扶持ヲ賜ル、程ナク表番医師格ニ進ミ、廩米百俵ヲ賜ル、明治元年、大学大助教トナリ大学東校病院専務、同四年海軍省六等出仕、病院専務、累進シテ海軍軍（ママ）大監ニ進ミ、従五位ニ叙セラル、同九年故アリ退官、復出

デズ、同三十八年父元仲没シ、単身戸主ナルヲ以テ、再ヒ実父ノ跡ヲ襲ヒ、虎炳ノ家名ヲ廃絶ス、一男一女ヲ挙グ、男雄太郎、女瓊子、大正十五年十月十三日卒ス、享年八十七歳、法名瑞光院釈開悟居士

奥山虎炳は大正一五年（一九二六）に八七歳で没したとあるので、逆算すると天保一一年（一八四〇）生まれとなる。系図には生年月日の記載はないが、『帝国医鑑』[1]（明治四三年）により天保一一年一月八日生まれであることをしりえた。

虎炳の父元仲、祖父直清は、ともに出羽国上山藩の藩医である。その長男が長崎で出生したということは、父元仲が長崎に居をかまえていたときに生まれたと考えられるので、元仲が長崎留学中に長男をもうけたといってよいであろう。

系図をさらに逆のぼると、奥山氏の祖奥山修理清隆は甲斐国奥山の生まれであるという。奥山は桂川の支流である葛野川の右岸、および浅利川の沿岸に位置しており、現在は山梨県大月市に属している。[2]『甲斐国志』には文化初年ですら戸数八二、人口三四二の山奥の寒村にすぎないので、系図にいう「甲州奥山之郷千貳百石」というのは、にわかに信じがたい。

清隆の曽孫にあたる清秀が、承応二年（一六五三）四月に時の上山藩主土岐山城守頼行に百石で召しかかえられた。これが奥山氏と上山藩との初めての出会いである。

清春の代になって一旦は禄をはなれて、手習や剣術の師範になった（元禄四年）が、元禄一〇年（一六九七）藤井松平氏信通が入部ののちふたたび上山藩に仕え、御持筒役をつとめた。

清春の曽孫玄育の代になってはじめて医師として藩につかえ、ここに藩医奥山氏が誕生した。[3]これ以後四世の孫虎炳にいたるまで、藩医として上山藩につかえた。

虎炳の父元仲は耕助、あるいは虎位（とらたか）といった。文化七年（一八一〇）八月六日の生まれで、藩校天輔館（のち明新館と改称）の主事となった。「専ラ漢学ヲ教授ス」[4]る藩校の教師に就任したわけである。系図からは元仲が藩校の教師に就任した事実しか知ることはできないが、明治二年六月二二日の触書きによって、奥山元仲が「芝赤羽根」の自宅を種痘所

出張所として種痘をおこなっていることが判明し、[5] 他の四カ所の出張所の医師がいずれもお玉ヶ池種痘所と関係を有していたように、元仲もお玉ヶ池種痘所創立にあたって資金を提供した八三名の中の一人である。

元仲は明治三八年一月八日、九六歳で病歿した。

その姓名

虎炳は「トラアキラ」とよむ。系図によればこの他に「瓊太郎」、「省吾」があり、前者は幼名でのち省吾とあらため、医師になってからは「玄省」あるいは「元省」と名のっていた。これは「ゲンセイ」とよむのが正しい。[6]

明治二年三月および五月の「医師姓名」[7]には玄省とあり、明治二年一二月の『職員録』[8]には虎炳とあるので、このころ玄省から虎炳へ改名したと考えられる。

歩兵屯所医師としての玄省（虎炳）

奥山虎炳は明治二年までは奥山玄省と名のっていたと考えられるので、この項と次項では玄省を用いることにする。

幕末に創設された歩兵組については、兵制史の側面からの研究はみられるが、これに附属した歩兵屯所附医師についての研究はほとんどなく、さきに私は屯所附医師としての手塚良仙と手塚良斎について報告した。[9][10] さらにその後、歩兵屯所附医師一〇一名についてもその動静をまとめて報告した。[11]

このさいに利用した史料に、手塚良斎の『医学所御用留』なる写本がある。[12] 医学所医師であった手塚良斎が、歩兵屯所出役を命ぜられた文久三年三月一三日から筆をおこし、慶応四年四月までの満五年にわたる歩兵屯所における活動記録である。題僉、扉とも『医学所御用留』となっているが、内容はもっぱら歩兵屯所附医師としての勤務日誌で、屯所医師の動静がくわしくしるされている。

『医学所御用留』にのる奥山玄省の身分は、「松平山城守家来」と明記されている。山城守の官名をもつ松平氏は、『寛政重修諸家譜』によると、藤井松平をはじめ、形原松平、元久松松平、能見松平、松平信綱流などがあるが、[13] このうち藤井松平は元禄一〇年に備中庭瀬から出羽上山に入部した松平信通の流れくむ上山藩主松平山城守である。これによって奥山玄省が上山藩医であることはあきらかである。

また慶応元年五月の条に、奥山玄省は手塚良仙らとともに、「歩兵屯所附御抱医師富士見御宝蔵番格」におおせつけられたむねの記事がある。これはさきにあげた系図の記述と一致するところである。

系図にある「慶応年間旧政府ヨリ擢レテ陸軍医官トナリ」とある「旧政府」とはもちろん徳川幕府であり、「陸軍医官」とは歩兵屯所附医師をさすことはいうまでもない。

以下『医学所御用留』から奥山玄省関係の記事を摘記する。

九月廿九日（文久三年）御増人被仰付……松平山城守家来奥山玄省……歩兵屯所附医師御雇被仰付（三丁オ）

十二月廿七日御上洛有之尤御浜ヨリ御乗船之事、歩兵局御供被仰付……西下医師……奥山玄省……尤正月十一十二十三十四之四日ニ出立之事、其砌御手当左之如し一御手当金十両月々五両ツツ被下　奥山元省（三丁ウ）

十月（文久三年）西丸下屯所ニ於テ小出播磨守殿被申渡候趣……当月ヨリ四ケ所場所持ニ相定可申……左之通持場ノ取極リ御頭衆連名ニテ一統江達し有之……西下詰　奥山元省（四丁オ）

六月十日（元治元年）西下一大隊小出播磨守、城織部殿帰府ニ相成奥山元省附添帰着（六丁ウ）

十一月廿三日大手前一大隊平岡四郎兵衛殿頭として長州辺出張附添医師為取締戸塚静甫被仰付……外ニ越山友仙、奥山元省被仰付候事（九丁オ）

子（ママ）五月……左之平勤之人名屯所附御抱医師被仰付、富士見御宝蔵番格之事、……奥山元省……（一四丁オ）

五月十八日御進発御供として大手前附……奥山玄省……出立之事（一七丁オ）

六月廿八日左之通り御達有之候事……小川丁歩兵方附　奥山玄省……右之通持場所相心得候様可相達候（一九丁オ）
十一月十二日六十日分旅御扶持方江戸出立ヨリ六十日分……奥山玄省……十二月朔相渡し候事（四二丁ウ）
慶応二寅年正月元日朝五ツ時登城、於大広間年首為御礼、四ツ半時出御　御目見被仰付候事、但シ陣羽織着用之事、
冨士見格……奥山元省……同刻御見仕候事（四七丁ウ）
二月三日奥山玄省門人浜田秀齋病気之処、養生不相計死去候段御届書差いたし候事（五〇丁オ）
奥山玄省門人浜田秀斎死去ニ付、右代リ青木貫司手伝被相勤候様、伊勢守殿以書付被仰渡候事（五三丁オ）
三月十九日本月分御手当九両ト十匁受取并ニ……奥山……分同数（五三丁オ）
……小川町歩兵方附　奥山元省　右之通持場割相心得候様可被相達候……六月廿八日……（七三丁ウ）
改正御医師惣人名……冨士見格御抱医師……奥山玄省……（七六丁オ）
二月四日（慶応三年）奥山元省附属小川町一大隊（ママ）帰ニ相成候事（八五丁オ）
西丸下二大隊上京仰付附属奥山元省……之四人被付候事、出立ハ五月十五日十六日十七日十八日之四日ニ出立之事
（八六丁オ）
五月十七日奥山元省事取締介被仰付候事（八六丁ウ）
芝赤羽根　奥山元省（九〇丁ウ）
正月廿二日（慶応四年）……奥山元省……右帰府可申候事（九九丁オ）

奥山玄省が歩兵屯所附医師に就任したのは、文久三年（一八六三）九月二九日である。文久三年二月歩兵組の兵営としての歩兵屯所が西丸下と大手前におかれ、同年五月には小川町、七月には三番町に新設されて都合四カ所になった。手塚良斎ら一一名の医師が屯所附医師に就任した当初は、その勤務は一カ月交代の輪番で各屯所を担当したが、病兵の治療に不都合だという理由で、一〇月からそれぞれの屯所に医師を専属させるように変更になった。そのさい玄省は西丸

下屯所に配属された。その後玄省の所属は何度か変更され、大手前、小川町そしてふたたび西丸下に所属した様子がみられる。

文久三年八月一八日の政変によって、公武合体派が政局の主導権をにぎったが、公武合体体制をさらに強固なものにするため、将軍家茂は第二回目の上洛の途についた。すなわち文久三年一二月二七日、家茂は浜御殿から海路江戸を出立した。歩兵奉行溝口伊勢守勝如が総指揮官となり、歩兵組千六百人がこちらは陸路上洛の途にのぼった。西丸下歩兵組にしたがって、奥山玄省は手塚良仙らとともに、翌文久四年正月一一日から一四日にかけて江戸を発進した。

第一回の上洛（文久三年三月）とはことなって、今回は右大臣の宣下があるなど、家茂は朝廷から手厚い接遇をうけて、ふたたび海路をとって五月二一日朝五ツ、浜御殿に到着した。歩兵組も続々と東下して、奥山玄省は六月一〇日西丸一大隊とともに帰府した。

慶応元年（一八六五）五月一六日、将軍家茂は家康ゆかりの陣羽織を着用して、きらびやかな供ぞろえで江戸を発進した。[14]すなわち第二次長州征伐の進発である。

奥山玄省は将軍進発におくれること二日の五月一八日に、大手前歩兵組の附添として江戸を出発した。大坂に到着した日はあきらかでないが、歩兵屯所医師取締としてこれに参加した手塚良斎は、江戸を閏五月四日に出発し、大坂には六月二二日に到着していたとの記述がある。[15]

手塚良斎は大坂上本町八丁目寺町の源光寺内の病院を旅宿とさだめ、任務を開始した。東寺町の全慶寺をはじめいくつかの寺院が病院として使用されたが、玄省の大坂での旅宿は記載されていない。

年があけ慶応二年（一八六六）の元旦をむかえて、玄省は朝五ツ大坂城に登城し、四ツ半大広間において将軍家茂にお目見えがかない、新年のあいさつを言上した。[16][17]

大坂を拠点として歩兵組の広島方面への出陣は、慶応元年から三年にかけていく度かみられるが、奥山玄省の動静に

ついては、『医学所御用留』に記録がみられない。

大坂在陣中の将軍家茂が城内で脚気のため死亡し、長州征伐は完全な失敗におわって撤兵がはじまった。手塚良斎は慶応二年一〇月二一日に、三番町、小川町の病兵一一九名をひきつれて江戸に帰着したが、玄省が江戸の土をふんだのは、それよりはるか後の慶応三年二月四日のことであった。

家茂の死去により慶喜が将軍職につき、政治の中心は京都にうつって将軍も京都や大坂に滞在しているので、その守護を任務とする歩兵組は東海道をせわしく往来するようになった。玄省は五月一七日、歩兵屯所医師取締介に昇進し、翌一八日江戸をたって西上した。

屯所附医師一〇一名のうち、役付医師（取締と取締介）に昇進したのは、手塚良斎、戸塚静甫、吉田策庵、高島祐啓、山本長安、手塚良仙、安井元達と玄省の八名にすぎない。

奥山玄省らは大坂滞在中に大政奉還の日をむかえ、二條城への総出仕を命ぜられ、翌慶応四年（一八六八）正月二二日に戸塚静甫ら一一名の医師とともに帰府した。

玄省（虎炳）の医学・語学伝習

玄省がどこで、誰について医学を学んだのか、現在までの史料からはごくわずかしかしることはできない。『医学所御用留』は、その医師が漢蘭どちらの医学に属しているかを明記していないが、配属の状況からある程度の推測はできる。さらに父玄仲が長崎に遊学したと系図にあり、またお玉ヶ池種痘所の発足にあたってその設立資金を拠出した八三名の蘭方医の一人であったことを考えあわせると、玄省が蘭方を学んだ医師であると断定してさしつかえないと思う。しかし『上山郷土史』にある玄仲が「蘭人シーボルトに就き洋医を研究し」[18]とあるのは、玄仲の長崎遊学が天保一一年（一八四〇）ごろ――玄省の出生の前後――と考えられるので、これについてはにわかに信じがたい。

つぎに玄省の長崎遊学について考えてみたい。『上山郷土史』には次のように記載されている。

佐倉藩医佐藤泰然に就き医学を学び、更に肥前長崎に到り、蘭医「ボードエン」に随ひ医術を深究(ママ)す。[19]

ボードインがオランダ医学伝習のため来日したのは文久二年（一八六二）九月であり、慶応二年（一八六六）一二月の離日まで、長崎において近代的教育法にのっとって近代医学を教授し、その後もふたたび三たび来日したことは周知の事実である。玄省が歩兵屯所附医師に就任したのは、さきにものべたとおり文久三年（一八六三）九月なので、これに先だって長崎遊学の機会をもつことは可能であった。

ボードインが長崎でおこなったコレラについての口述訳稿がある。新潟医学校長竹山屯の『医事雑記』に収載されている「ボードエン先生口述」[20]の見出しをもつ記事がそれで、コレラの原因、症状、治療について簡潔にしるされている。その跋文につぎのような記述がある。

右文久三亥六月和蘭第一等医官ボードエン於嵩陽養生公館伝習ス抜言

較二朋百氏古列刺治準一無二甚逕庭一。但説二病原病症一稍精及用二越列幾的児艾灼法一是為異耳。今茲五月官奉外夷拒絶之命遂辞暴度印氏伝習於是

官医及諸藩医悉皆雲散矣。予亦在員中遂ニ不視及先生親把二神七一奏二聖功一之技倆。此実千歳遺感也。然今覧二其説一想二其技一三百里外犹。耳聞二其説一而目視二其技一不亦快乎哉。先生身長体瘦齢四十有三。為レ人温厚淳朴誨レ人不レ倦。位居二第一等医員一。其学術超絶技術精妙非下予輩所上レ得二而窺測一也。

奥山元省記

癸亥仲秋

本書が文久三年六月、長崎養生所においてボードインがおこなった講義の翻訳であることは、跋文の前書きによってしることができる。ここでは本書の内容にたちいることはさけて、玄省の跋文について考察をくわえたい。

尊王攘夷派の圧力によって、徳川幕府は攘夷開始の期日決定をせまられ、その日を文久三年（一八六三）五月一〇日と

することを布告した。[21] これが「今茲ニ五月官外夷拒絶ノ命」である。しかし当の幕府もこれを実行しようとする意志はもっておらず、また到底実行できる状況ではなかったにもかかわらず、この跋文をみるかぎり、この布告にもとづいてボードインの講義は中止においこまれ、その結果長崎に留学していた幕府や諸藩の医師は、長崎をあとに各地に散っていったという。

このような状況のもとで、奥山玄省は長崎医学伝習にくわわっていながら、ボードインの講義や臨床実習に参加する機会をうしなったのである。これによって玄省が長崎に留学していたことはあきらかであるが、[21a] ボードインの指導をうけていないこともまたあきらかである。玄省が「此実ニ千載ノ遺感ナリ」とのべている心境は充分理解できる。

佐藤泰然の順天堂への入塾については、『順天堂史』について門人関係を調査したが、玄省の名を見出すことはできなかった。

『上山郷土史』には玄省が医学の道にはいる以前の漢学や蘭学の学習について、つぎのようにしるされている。

幼時父玄仲に随ひ東上して林藕潢（小林家）の塾に学び、転じて安積艮斎、安井息軒の門に入る。弱冠蘭語を家庭に修め、蘭語を堀達之助に受く。[18]

その時期は不明ながら幼にして父にしたがって江戸にでて、第一一代大学頭林復斎（号藕潢）の門にはいったという。これは昌平黌へ入学した、と解してよいであろうか。ついで安積艮斎、安井息軒という名だたる儒学者から漢学を学んでいる。

この漢学の基礎の上に、まず父からオランダ語の手ほどきをうけた。父玄仲がそれだけの蘭語の知識をもっていた、と解釈してよい。

ついで『上山郷土史』は、さらに堀達之助についてオランダ語を学んだとのべているが、これについてはいささか吟

味を要するものと思われる。堀達之助[22]は長崎のオランダ通詞中山作三郎武徳の五男として、文政六年（一八二三）一一月二三日にうまれた。幼くしてその学才をみとめられ、同じ通詞仲間である堀儀左衛門政信の養子となり、家業をついでオランダ通詞として活躍した。

フェートン号不法侵入事件によって、「迫りくるイギリス」の巨大な影が幕府をはじめ有識者の上におおきくおおいかぶさってきた。イギリスという国の存在に目をひらかれた幕府は、これを契機として事件の翌年の文化六年（一八〇九）に、長崎のオランダ通詞たちに英語の学習を命じた。オランダ商館次席のヤン・コック・ブロムホフを教師として英語教育がはじまり、着々とその成果をあげていた。[23]

堀達之助はブロムホフから直接教育をうけてはいないものの、英語伝習第一世代に属していたといえる。[24]堀は弘化二年（一八四五）二三歳の折、小通詞末席として相州浦賀詰めを命ぜられた。翌弘化三年アメリカ東印度艦隊司令官ジェイムズ・ビッドルが浦賀に来航の折には通訳の任にあたり、書簡の和解に従事している。イギリス通詞としての晴れの舞台といえよう。

嘉永六年（一八五三）アメリカ東印度艦隊司令官マシュー・ペリー来航の折にも通訳をつとめ、翌年三月日米和親条約締結にあたっては、主席通詞の座は森山栄之助にゆずったものの、条約文の翻訳にしたがっている。

下田在勤中にふとしたことから官憲の疑いをうけ、安政二年（一八五五）から安政六年まで、小伝馬町の獄につながれるという苦い経験をしたこともある。著書調所総裁古賀謹一郎の尽力によって出獄がかない、同所の翻訳方に就任した。その後開成所教授に昇進し、文久二年（一八六二）には『英和対訳袖珍辞書』を編集出版した。堀達之助はオランダ通詞よりもイギリス通詞として幕末期に活躍した人物として記憶されている。

奥山玄省が堀達之助の門をたたいたのがいつのことか明らかではないが、その場所は江戸、あるいはその周辺であることはまちがいない。達之助が江戸出府にあたってイギリス通詞としての任務をおびていたことを考えると、玄省が達

之助から教えをうけたのは、オランダ語ではなく英語であったといえよう。後のことになるが、明治六年（一八七三）海軍病院学舎（のちの海軍軍医学校）の発足にあたって、政府は医学教師としてイギリス人ウィリアム・アンダーソンを招聘[24a]し、すでに来日していたエドウィン・ホイーラーとともに海軍軍医生徒の教育にあたらせた。イギリス人教師たちの講義の通訳にあたったのが、当時学舎長の任にあった奥山虎炳自身であった。堀達之助から教えをうけた虎炳が、英語に長じていたことをしめすエピソードである。

古賀謹一郎が入牢中の堀達之助を特別の計いをもって出獄させようと幕府にはたらきかけたのは、ある意図をもっていたからである。わが国最初の英和対訳辞書である『諳厄利亜語林大成』がなったのは文化一一年（一八一四）であるが[25]、この発音はブロムホフが口にしたものをかきとめたものなので、カナ表記にはかなりのオランダ語・ドイツ語のなまりが濃くあらわれていた。発言を正しくした本格的な英和辞典編纂の必要性は、時代の要請であったのである。そのためにこそ堀達之助の学才が必要であった。

このような英語読解力の持主である堀達之助ではあるが、会話の能力においては抑留アメリカ人ラナルド・マグドナルド[26][27]から直接教えをうけた森山栄之助より劣っていたといわざるをえない。ペリー艦隊が初めて来航した嘉永六年（一八五三）には堀が主席通詞であったが、翌年の再来航時には森山が堀に代って主席の座につき、堀はその補佐役として文書の英訳や和訳をいう、いわば裏方の仕事に従事した。

フェートン号事件以後イギリスへの関心がたかまり、英語の重要性を認識した幕府は、嘉永元年（一八四八）エゾでとらえられ、長崎へおくられたマグドナルドについて、通詞たちにネイティヴの英語――とくに英会話――を学ばせた。このときの通詞の名がしられているが[28][29]、堀達之助の名はない[30]。

堀達之助の英語――とくにその発音と会話の能力――がもし以上にのべたようであるならば、その教えをうけた奥山虎炳、そしてその弟奥山虎章にも、そのような傾向がみられたのではないだろうか。ちなみに奥山虎章は明治期になっ

て、英和医語辞典と独和辞典を編纂している。

大学人としての虎炳

明治新政府は慶応四年（一八六八）六月医学所を復興し、名称も旧のまま使用して新政府の医学所として運営することになり、奥山玄省はここに「三等医師・病院掛」として勤務することになった。それがいつであるかはあきらかではないが、明治二年三月の「医師姓名」[7]によってそれをしることができる。

この姓名録には緒方惟準が取締として主宰者の地位を占め、一等医師石神良策が取締助となっている。病院掛の筆頭は二等医師池田謙斎、教授職の筆頭は同じく二等医師島村鼎甫である。

奥山玄省のほかに歩兵屯所附医師の経歴をもつ医師は、桐原玄海、安井元達、馬島春庭（いずれも四等医師）、吉田策庵（五等医師）、手塚良仙（等外）がおり、お玉ヶ池種痘所設立時の拠金者に名をつらねていた蘭方医としては、岩井元敬をはじめ九名の名がみえる。

さらにその二カ月後の「医学校職員」[31]なる名簿にも、その病院の部に「六等官・副当直医官」としての奥山玄省の名がみえる。

ここにいう副当直医官とは「病院規則草案」によると

毎日第七字半出勤当直医官之差図ニ随ひ院内之庶事を相勤可申、壱人ハ教師之廻診ニ附添貳人ハ外来診療所江出院壱人は当番所ニ詰、入院出院等都而詰所之諸用弁じ可申、尤内外病名之処方筆記ハ其職掌と可心得事、但同勤中交番相定壱人宛昼夜在院当直医官と力を合院内病者ニ注意可致事[32]

とあって、現在いうところの病院常勤医であり、当直医官の指示のもとに外来診療も病室勤務もおこなう医師である。このほかに「副当直医官試補」「看病方取締」「看病方取締助」などの職名がある。

この名簿に旧医学所や歩兵屯所出身の医師の名がおおくみえるのは、技術畑の人材不足の折から、明治新政府としてはこれらの施設から多数の医師を採用せざるをえなかったことを物語っている。

さらに別の面から奥山玄省の地位をさぐってみたい。すなわち明治二年一二月の『職員録』[8]をみると、大学校のトップは別当兼侍読の松平慶永（福井藩主）であり、奥山虎炳は「大学校中助教」である。翌三年六月の『職員録』[33]でも同様である。同じ中助教には足立寛、田代基徳、桐原真節がおり、少助教には黒川真頼、長谷川泰の名がみえる。

この『職員録』では虎炳の名を使用しているので、明治二年五月から一二月の間に、玄省から虎炳へ改名したものと思われる。

しかしこれを最後として、翌四年一一月以降の『官員録』の大学欄に、奥山虎炳の名を見出すことはできない。一方明治五年五月に虎炳が「大学東校大助教」であったとする記録もみられるが[34]、その昇進の期日についてはふれていない。これによれば虎炳の大学人としての生活は明治五年五月にはまだ継続中であったということができようが、これについてはさらに考察をくわえなければならない。

海軍医官としての虎炳

大学東校大助教奥山虎炳を兵部省に採用したいと、兵部省から大学に申しいれをしたのは明治四年五月八日である。これにたいし大学から承諾の旨をしるした文書が提出されたのが五月一二日であり[35]、七月五日に海軍病院掛専務にあげられた[36]。

兵部省に海陸二軍共通の軍医寮が設置されたのは明治四年七月五日である[37]。これをもってわが国軍軍医部の発足とみてよいが、それ以前にそのような部局がまったく存在しなかったわけではない。

明治維新をむかえて軍制の確立をめざした新政府は、太政官の下に海陸二軍を包含した軍務官を設置したが[38]、軍医部

に相当する部局はまだおかれていない（慶応四年閏四月二一日）。ついで五月二三日に軍務官病院掛がおかれるが、その活動については記録がのこっていないので、内容についてはまったく不明である。同年一〇月一日山下門内にわが国陸軍病院の濫觴といわれる兵隊仮病院が新設されているので[39]、軍務官病院掛はこの管理、運営にあたったのではないかと推測される。

明治二年七月八日官制が改正され、軍務官が廃止されて兵部省が設置されたが、軍医部に関するかぎり海陸軍はそれぞれ独自の歩みをはじめる。下谷和泉町の旧藤堂邸に設立された大病院は陸軍主体の軍病院であったため、海軍側は芝高輪の旧近江水口藩加藤越中守明実の下屋敷跡に海軍病院を設立した（明治三年六月）。海軍病院という名称ながら病兵の治療所としての病院機能をもっていただけでなく、海軍における医務や衛生業務をつかさどる行政、管理機能も有していた。その後（明治四年五月一八日）にこの海軍病院は芝車町（現在の高輪二丁目）の外務省応接所に移転した[40]。奥山虎炳の辞令にある海軍病院とはこれをさす。

兵部省軍医寮が発足し、その主宰者として松本良順が軍医頭に任命されたが、薩摩藩出身者のおおい海軍や海軍医官は、長州の山県有朋の推輓で軍医頭に就任した松本良順の風下にたつことを肯ぜず、その就任さえ反対したといわれている[41]。松本良順も海軍にたいしてはそれ以上意をつくすことなく[42]、あっさり手をひいてしまったので、さらにその距離は遠いものになって、海陸軍はそれぞれ独立した歩みをつづける。

明治四年四月四日大学大博士佐藤尚中が海軍病院取建御用掛に任命され、同時に大学出仕藤田圭甫も海軍病院掛事務に任命された[43]。これにおくれること三カ月の七月五日に、奥山虎炳は海軍病院専務に就任した[36]。専務とはいってもその身分がまったく海軍に転属したのではなく、文部省との兼務であったことをうかがわせる史料がある。

文部省出仕海軍病院専務　藤田明術

文部大助教海軍病院専務
奥山虎炳

右更ニ七等出仕海軍病院掛リ被　仰付候様早々御沙汰被下度此段申出仕候也

辛未九月十八日　　兵部省

正院御中[44]

いうまでもなく藤田明術は藤田圭甫であり、両者とも文部・海軍の兼務である。辛未は明治四年にあたる。文中に「更ニ」とあるのはすでに海軍に関係していることをあきらかにしめしているものと思われる。

この申達をうけて太政官から次の辞令が発令され、この日から海軍専任になったといえよう。七等出仕というのは少医監（少佐相当官）にあたる。

従七位　奥山虎炳

兵部省七等出仕被仰付候事

辛未九月二七日　　太政官

海軍病院分課申付候事[45]

翌明治五年二月一七日に奥山虎炳は兵部省六等出仕となり、ついで三月八日には海軍省六等出仕となった。これは二月二八日に兵部省が海陸の二省に分離されたことによって、あらためて海軍省出仕の辞令が交付されたものと思われ、その職務に何ら変更はなかった。

明治六年一月の『袖珍官員録』[46]では、奥山虎炳は戸塚文海とならんで大医監である。大医監は五等官で、のちの海軍軍医大佐にあたる。まさに高級医官であり、陸軍においては松本良順が軍医総監で少将相当官であるが、海軍において

はこれに相当する医官は存在せず、大医監が最高位である。

一方事務方の軍医頭、権頭はともに欠員で、助として石神良策がいるが、これは六等官にあたり、奥山虎炳の方が上席である。

のちに初代海軍軍医総監に任官した戸塚文海は[47]天保六年（一八三五）生まれで、虎炳より五歳の年長にあたる。幕府奥医師戸塚静海の養子となり、長崎養生所の所長や幕府奥医師をつとめたのち、勝安芳の紹介で明治五年五月二七日に海軍七等出仕として海軍医官に就任した[48]。

その後の官員録からもわかるように、虎炳は常に文海より上席にあり、『公文類纂』所収の文書からも石神良策よりも上席であることがうかがえる。虎炳はまさに海軍軍医寮のトップであったといってよいであろう。

勝安芳は明治五年五月海軍大輔に就任し、明治八年四月までの三年間、虎炳の上司として海軍の実質的な責任者であった。しかし『海舟日記』のいずれの箇所にも虎炳の名を見出すことはできず、それにひきかえ戸塚文海の名は随所にみられる。その初出は明治五年正月一〇日の条で[49]、両者ともいまだ海軍出仕以前の時期である。

海軍出仕後は軍医寮の人事問題について、本来ならば軍医寮助の石神良策なり、先任大医監である虎炳なりに相談あってしかるべきであるが、勝の相談相手は戸塚であった[50]。海軍出仕以前からすでに交流があり、その後も終始その関係がつづいていることが、『海舟日記』から推測することができる。

明治八年四月一日海軍軍医寮助石神良策は、五五歳で現職のまま他界した。その後の官員録において助のポストは欠員のままであり、大医監の虎炳と戸塚の序列に変更はなく依然虎炳が上席をしめていた。しかし明治九年四月の官員録[51]では、その序列に変更はないものの戸塚文海は「海軍省四等出仕」の肩書が附記されており、ここに次の人事の布石の手がかりをよみとることができる。

このように頭も助も欠員のまま、明治九年八月三一日をむかえる。この日官制の改正があって海軍軍医寮は廃止され、

それにかわって海軍省医務局が設置されて、大医監戸塚文海が初代医務局長に就任した。戸塚は海軍病院長と海軍軍医学舎長も兼任し、一二月には最高位の軍医総監（少将相当官）に昇進して、官職とも文字どおり海軍医官の第一人者になった。

海軍への出仕もおそく、終始序列が下位であった戸塚文海が、薩摩閥のつよい海軍省と、海軍省中枢の一人であった勝安芳との関係から、海軍医官の最高人事の選にはいったことは、奥山虎炳としては退官以外の道はなく、痛恨のうちに海軍をさったものと思われる。時に虎炳は三七歳という若さであった。これは明治初年といえども「若すぎる退官」といわざるをえない。系図にいう「同九年故アリ退官、後出デズ」という記述のその「故」に言及した史料はないが、今までのべたような事実から、その「故」は説明しうるものと思われる。

奥山虎炳の海軍における業績の一つに講義の翻訳と医書出版がある。

将来海軍医官となるべき生徒の養成機関として、海軍病院学舎が設立されたのは明治六年八月九日である。[52] それ以前にも特別な名称はもっていないが、明治四年からイギリス海軍軍医エドウィン・ホイーラーの指導のもとに、海軍病院において医官の教育がおこなわれていた。[53] このホイーラーと、学舎発足にあたってあらたに招聘したウィリアム・アンダーソンによって、学舎生徒の教育がおこなわれた。アンダーソンらの講義はもちろん英語であり、そのころの生徒の英語力がとぼしかったので「奥山虎炳主トシテ講義ヲ通訳」[54]したのである。

高木兼寛の軍医寮の修了証書に、試験官であるアンダーソンと、海軍大医監奥山虎炳の署名がみえる。明治七年四月二日の日付をもつ本証書は、署名以外はすべて英文でかかれている。[55]

さらに虎炳は海軍軍医寮関係の出版物に、校閲者として参画している。これについては項をあらためて言及したい。

海軍退官後の虎炳

『上山郷土史』に

明治九年願に依り退職し、芝赤羽橋畔の父玄仲を輔けて門戸を張り明治三十四年に及ぶ。其の歳廃業して伊皿子に転住し、悠々自適風月を友として詩境に逍遥し、大正十八年十月十三日眠るが如く逝く。[18]

とある。これによれば海軍退官後は直ちに父玄仲をたすけて、開業医としての生活をはじめ、明治三四年まで開業医をつづけてこの年六二歳をもって廃業したことになる。

しかし一方『帝国医鑑』[1]によると、「明治一七年五月一五日附開業免許ヲ受ケ現所ニ開業ス」とある。現所というのは同書によれば「芝区伊皿子三五」で、開業の時期も場所もさきの記述とはことなる。

明治七年「医制」の発布によって、医術開業をおこなうものは開業免許をうけなければならないと規定した。そうは規定したものの、在来から開業していた医師にたいしては、その既得権をみとめていろいろな経過措置をとって、現場での混乱が生じない手だてが講じられている。その措置の一つに「奉職履歴医」の制度がある。明治維新以来医術をもって官庁に勤務したり、地方公立医学校や病院において教員や医員をつとめているものにたいして、試験を課することなく免許を交付することが明治一〇年八月にさだめられた。

奥山虎炳はまさにこれに該当する。海軍退官後父の医院を手伝うにあたって、開業免許を所持しないからといって、直ちに法律に違反するとがめだてされるわけではなし、明治一七年までそれを手にすることがなかったのは、奉職履歴医としての手続きをとるのが単におくれただけといってよい。免許の有無にかかわらず、開業医としての生活は海軍退官直後からはじまったことは事実と思われる。

明治九年の開業後は、系図にいう「復出テズ」の状態であった。

『帝国医鑑』の虎炳の記述は、わずか二行で終っている。本人から提出された経歴をもとに編纂された（凡例による）本書は、さして有名でない医師でもその記述はさらに詳細にわたるものがみられる。虎炳はこれにのせることは承諾したものの、経歴については最小限の記述しか提出しなかったと考えざるをえない。

明治一八年九月七日出版の「西洋医師番附」[56]には、虎炳の父玄仲が種痘家として赤羽根に居住している旨の記載はあるものの、虎炳自身の名はどの欄にもみえない。

海軍医官の大物が死亡するとその人の略歴をのせるのが常である『海軍軍医会雑誌』に、虎炳の死亡記事を見出すことはできなかった。[57]海軍退官から死亡するまでに、五〇年という長い時間の経過があるためか、虎炳がかって海軍の高級医官であったことを記憶する人がほとんどいなかったからともいえようが、この五〇年の間、世間に自らが高級医官であったという経歴をあえてしらしめなかった結果ではないかと考えられる。

石神良策の墓碑や[58]「英国大医ウヰリアム・ウヰリス氏頌徳記念碑」[59]などの拠金者の一人に奥山虎炳の名はみえるが、世俗の生活では世にでることをこばんでいる、ともいえる退穏的な様子がみえる。

奥山虎炳の校閲書

奥山虎炳に著書はないが、海軍軍医寮関係の書物には医療関係の責任者としての立場から校閲に関与したものがみられる。

明治五年出版の『海軍軍医寮薬局方』（官版薬局方）は、イギリス薬局方を主体にして製剤三三〇種を収載しており、大軍医前田清則の訳述であるが、虎炳はこれを校閲している。

海軍病院でホイーラーがおこなった解剖学の講義をまとめて出版したのが『官版講筵筆記』であり、翻訳者は虎炳の弟奥山虎章[60]と長州藩出身の半井成質である。これに虎炳は緒言と例言をかいている。接しうる虎炳の医学上の業績にと

ぼしい現在、その全文を引用するのも無意味ではないと思われる。

緒言

英ハ元ト撮爾タル三島嶼ノミ然ルニ国富ミ兵強ク其所轄ノ領邑殆ント五大洲ニ跨リ宇内ニ雄視スル者豈ニ夫ノ多ク海兵ヲ養ヒ船艦ヲ造リ以テ専ラ航海ヲ事ニスルニ非ズヤ蓋シ我邦環海国ヲ為シ一旦辺徼事アレバ数百艘ノ船艦数十万ノ海兵有ルニ非ンバ固ヨリ之ヲ控禦スル克ハス是レ海軍ノ設ケ一日モ欠ク可ラザル所以ナリ凡ソ人生ノ痛楚疾病ヨリ惨ナルハ無シ疾病中又タ客土ノ疾病ヨリ甚キハ莫シ兵時ハ姑ク之ヲ置ク今一介ノ船艦ニ駕シ万里ノ重洋ヲ凌ギ浩波鯨涛天地無際外之ニシテ瘴霧ノ其身ヲ侵伐スル有リ内之ニシテ妻孥ノ湯薬ニ侍ル無シ孤枕冷衾日夜呻吟其情実ニ愍ムニ堪タリ是時ニ方リ其疾病ヲ医シ其痛苦ヲ救フ者其レ我ガ医士ニ非シテ誰ソヤ是レ病院ノ設ケ無カル可ラザル所以也今茲辛未官権リニ病院ヲ創シ以テ海兵ノ痾ヲ抱ク者ヲ養ヒ又タ英医法沕列児氏ヲ延シ施治ノ余リ更ニ講筵ヲ開キ以テ院中子弟ニ解体学科ヲ授ク嗚呼今也王綱復古百揆維新特ニ兵備ヲ厚シ以テ国基ヲ養フ若シ数年ノ後チ海兵十万大艦雲集絶域ヲ視ル比鄰ノ如ク大洋ヲ視ル坦途ノ如クニ至レバ特リ以テ四彊ヲ防禦スルニ足ル而已ナラズ以テ万国ニ対峙シ皇威ヲ宇内ニ耀サンコト何ノ難キカ之レ有ラン則チ今日海兵病院ノ設ケ亦タ与テ功有ルト云フモ其レ誰カ之ヲ溢美ト謂ンヤ

明治四年辛未菊月望後一日奥山虎炳識于三田魚籃宗清精舎

この緒言につづいて、次のような例言がみられる。新しい解体書としてホイーラーの講述するところを編纂し、これがヘンリー・グレイの解剖学書にもとづくことをあきらかにしている。

例言

一輓近医学日闡ケ月盛ンニシテ各所病院ヲ設ケ洋医ヲ招キ其訳述スル所ノ書汗牛充棟啻ナラズ然レドモ解体書ニ至テハ寥々聞クナシ杉田氏解体新書ハ既ニ陳腐ニ属シ合信氏全体新論ハ猶ホ太簡ヲ恨ム今法沕列児氏ノ講述スル所

ヲ見ルニ専ラ愚礼私氏ニ拠リ要ヲ采リ煩ヲ去リ簡ニシテ奥ヲ究メ疎ニシテ漏サズ本ト以テ院中新進子弟ヲ教誨シ敢テ大方君子ノ高覧ニ供スルニ非ラズ唯我儕謭劣不文紕繆ナキニ非ラズ看官其レ之ヲ恕セヨ

一訳例専ラ先輩ヲ師効シ敢テ妄為臆造セズ唯細微ノ部分未ダ先輩ノ訳ヲ経ザル者ニ至テハ別ニ慎ンデ訳字ヲ創シ之ニ塡ツ然レドモ猶其ノ妥当ヲ欠者無キヲ得ズ看官之ヲ諒セヨ

一篇中按字ヲ冠スル者皆筆記者ノ挿注ニシテ且ツ毎篇首図式ヲ掲グルハ唯看官了解ニ易カラシムル而已

辛未九月　　奥山虎炳又識

また明治初年のイギリス流外科をわが国に紹介した書物として有名な、半井成質翻訳『外科拾要』（明治六年）も、虎炳の校閲をへており、虎炳が序文をよせている。その序には虎炳自らが長崎に遊学したことをのべており、その折半井成質（有章）とはじめて知己をえたとしるしている。

外科拾要序

予自小少之時交四方後髪之士大率不下数百人成有怜悧軽俊可次期大成者或有孜〻勉励可以冀晩節者今而□□□□□沈淪泯没帰乎澌尽灰滅而其能嶄然露頭角為世所知者僅〻可屈指而已蓋嚮之為怜悧軽俊可以期大成者半途意満自安小成其所欲声色游蕩之事其所講衒人弋利〻術習以為是恬不之怪其為孜〻勉励可以冀晩節者及其一旦畜妻孥獲微官則内有米塩之累外召人事之忙心期齟齬終歳栖〻精神為耗予之曽在于崎嶇也与半井有章始相識明治戊辰再相遭于東校同其窓者三年後倶転任海軍同其居者又二年蓋其人深沈有大志善勉学自非疾病事故前後五年〻久未曽一日廃其課程予惰生也于花于月乃游之酔或夜半夢回挙枕而顧之則有章屹然対灯烱〻之光射我目琅〻之聲徹我耳自知其不及遠甚也去秋有章買廬于聖坂之側召妻孥自其郷親管家政矧公事鞅掌罔或寧処予竊恐其志気或少沮也而有章則退食余暇偷間惜陰俛□刻励不知頭之将生二宅今又克就是挙自非其信道厚而精力絶人者烏能如是哉及其徴辞慨然書其巻首

明治六年五月□奥山虎炳識于伊皿子台町僑居

『官版講筵筆記』を翻訳した奥山虎章には、ロブリー・ダングリソンの医語辞典を翻訳編纂した『医語類聚』（明治六年）がある。その初版本の「医語類聚引」は、虎炳の筆になるものである。[61] ここにいう「動氏」とはダングリソンのことである。

医語類聚引

茫茫宇宙国於其間者無慮数百地異其方州殊其俗譬諸人面之不同然而東西往来得以交其人通其情者豈非以有夫言語文字便也耶西洋諸国各異其語就中若英仏二国則其用最広天涯地角人誦而家譜之雖然其確鑿有拠可以為千古之準則者其唯剌甸語乎蓋剌甸之為語古雅幽奥理該而用広句短而意長寔為学者之師表矣独奈何詰屈聱牙難解易倦世又乏此字書学者偶開巻而遭剌甸語不覚睡魔襲其後家弟章有慨于此頃者専就動氏医学字書摘其英釆其華聚為一小冊子今將授之剖劌氏徴予辞抑此書専主簡約雖国非医学字書之大全青衿子弟之從事于此学者苟置諸座右則其於昕夕研鑽之際未必無小補云爾

明治壬申孟秋　　海軍医生奥山虎炳誌

虎炳の肩書は「海軍医生」としかしるされていない。この年虎炳はすでに海軍大医監に任官していながら、あえてそれを用いなかったのは虎炳の人柄のあらわれというべきであろう。

おわりに

明治初年に海軍軍医寮の最高責任者ともいうべき地位にあった奥山虎炳の事蹟について、在来の史料と新しく見出された『奥山氏系図』をもとにその概略をしるした。

奥山虎炳（玄省）年譜

天保11年（1840）	1月8日	玄仲の長男として長崎で生まれる
文久3年（1863）	9月29日	歩兵屯所附医師になる
慶応元年（1865）	5月	歩兵屯所附御抱医師富士見御宝蔵番格になる
2年（1866）	正月1日	将軍家茂にお目見えする
3年（1867）	5月17日	歩兵屯所医師取締介になる
明治2年（1869）	3月	大病院三等医師病院掛
	5月	大病院副当直医官（六等官）
	12月	大学校中助教
3年（1870）	6月	大学中助教兼大舎長
4年（1871）	7月5日	海軍病院専務になる
	9月27日	兵部省七等出仕になる
5年（1872）	2月17日	兵部省六等出仕になる
	3月8日	海軍省六等出仕になる
6年（1873）	1月	海軍軍医寮海軍大医監従七位
	8月9日	海軍病院学舎長を兼任する
7年（1874）	10月	従五位
9年（1876）	8月31日	海軍を退官し父の開業を手伝う
17年（1884）	5月15日	開業医免許をうける
34年（1901）		開業を廃す
大正15年（1926）	10月31日	死去、87歳

本論の要旨は一九九四年五月一五日第九五回日本医史学会総会において発表した。稿を終えるにあたり、ご指導、ご助言をたまわりました奥山虎二先生、蒲原宏理事長、黒沢嘉幸先生、久志本常孝名誉教授、酒井シヅ教授、宗田一常任理事の諸先生に心から感謝申しあげます。

注と文献

(1) 河野二郎編『帝国医鑑』おの部三一頁、旭興信所、明治四三年

(2) 『角川日本地名大辞典』一九巻、山梨県、二一八頁、角川書店、昭和五九年

(3) 奥山玄育の事蹟については日本医史学会例会（一九九三年一二月一八日）に発表した。その抄録は『日本医史学雑誌』四〇巻三二七―三二八頁に収録されている。

(4) 文部省総務局編『日本教育史資料一』八四〇―八四四頁、明治二三年

(5) 山崎佐『日本疫史及防疫史』二九八頁、克誠堂、昭和六年
ここには渡辺春汀、平塚良仙（これは手塚良仙が正しい）、大野松庵、桑田立斎、生田良順とともに奥山玄仲（ママ）の名がある。

(6) 『公文類纂』明治四年、巻一二、一二六丁。明治四年奥山虎炳大学大助教を兵部省に採用したいとの申入れがあり、ここに奥山大助教が「奥山玄静」としるされている。

(7) 「大病院・医学所・種痘所・楳毒院医師姓名」明治初年医史料　中外医事新報別刷『日本医史学雑誌』昭和一八年（復刻版）、一七頁、思文閣出版、昭和五四年

(8) 『職員録』明治二年、須原屋版　寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』一巻、寺岡書洞、昭和五四年

(9) 深瀬泰旦「歩兵屯所医師取締　手塚良斎と手塚良仙」『日本医史学雑誌』二五巻二九〇―三〇六頁、昭和五四年

(10) 深瀬泰旦「手塚良仙光亨知見補遺」『日本医史学雑誌』二七巻二一―三四頁、昭和五六年

(11) 深瀬泰旦「歩兵屯所の医師たち――『医学所御用留』から――」『日本医史学雑誌』三一巻三七二―三九一頁、昭和六〇年

(12) 手塚良斎『医学所御用留』順天堂大学医学部山崎文庫蔵

本書は一〇六丁、半紙本の写本で、題僉には「文久三―明治八年手塚良斎　医学所御用留」とあるが、本文は慶応四年四月でおわっている。第一丁から本文の末尾まで、使用されている紙料はすべて同一であり、同一人の手蹟である。第一丁に良斎の死亡の年が明記されているので、この御用留は良斎自筆本ではなく、明治中期ごろの写本と考えられる。

(13)『新訂寛政重修諸家譜』一巻四二―四八頁、続群書類従刊行会、昭和三九年

(14)昭徳院殿御実記『続徳川実記』四篇、六七九頁、吉川弘文館、昭和五一年

(15)手塚良斎、前掲書、一九丁オ

(16)手塚良斎、前掲書、四七丁ウ

(17)昭徳院殿御実記、前掲書、八四三頁

(18)渋谷光雄『上山郷土史』二二三頁、昭和二年、『上山市史編纂資料』一二巻、昭和三〇年に収載

(19)渋谷光雄、同書、二二三頁

(20)「ホードヱン先生口授」竹山屯、『医事雑記』、本書は蒲原宏先生のご教示による。

(21)井野辺茂雄『幕末史概説』三五八頁、紀元社、昭和二年

(21a)奥山玄省が長崎に留学していたことは、『外科拾要』にある玄省の序文にもしるされている。

(22)昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』二巻、二六三―二九九頁、昭和女子大学光葉会、昭和四四年

(23)今井宏『日本人とイギリス――「問いかけ」の軌跡』四六頁、筑摩書房、一九九四年

(24)今井宏、同書、五二頁

(24a)アンダーソンの来日にあたって奥山虎炳、石神良策ほか二名が横浜まで出むかえた（『公文類纂』明治六年、巻四、二四一丁）。

(25)今井宏、前掲書、四八頁

(26)昭和女子大学近代文学研究室、前掲書、一七九―二一五頁

(27)古賀十二郎『長崎洋学史』上巻、一四六―一五六頁、長崎文献社、昭和四一年

(28)昭和女子大学近代文学研究室、前掲書、二〇一頁

(29) 古賀十二郎、前掲書、一五一頁

(30) マグドナルドに英語を学んだ通詞は文献(28)、文献(29)によれば一四名で、一三名は両文献とも共通の氏名があげられている。マグドナルドの記録にあるInderego Horu（あるいはHoru）を文献(29)は堀一郎とし、文献(30)は「不明、綴字正しからず」としている。

(31) 「医学校職員」『日本医史学雑誌』昭和一八年（復刻版）二三頁

(32) 「病院規則草案」同書、三一頁

(33) 『職員録』明治三年、和泉屋版、寺岡寿一、前掲書

(34) 『東京帝国大学五十年史』上冊、三九〇頁、昭和七年

(35) 『公文類纂』明治四年、巻一二、一二六丁

(36) 壁島爲造『海軍衛生制度史』一巻、八八頁、海軍軍医会、大正一五年

(37) 『法規分類大全』第一編、兵制門四、陸海軍官制四、陸軍四、一頁、明治二四年

(38) 陸軍軍医団『陸軍衛生制度史』一―三頁、大正二年

(39) 黒沢嘉幸「山下御門内假病院」『日本医史学雑誌』四〇巻二八一―二九二頁、平成六年

(40) これまでの記述は、壁島爲造『海軍衛生制度史』による。

(41) 鈴木要吾『蘭学全盛時代と蘭畴の生涯』一七五頁、東京医事新誌局、昭和八年

(42) 神谷昭典『日本近代医学のあけぼの――維新政権と医学教育』一三八頁、医療図書出版社、一九七九年

(43) 壁島爲造、前掲書、六八頁

(44) 『公文類纂』明治四年、巻四、一五三丁、「辛未」は明治四年である。

(45) 同書、一五〇丁

(46) 『袖珍官員録』明治六年、須原屋・和泉屋版、寺岡寿一編『明治初期の官員録・職員録』二巻、寺岡書洞、昭和五五年

(47) 戸塚文海については次の諸論を参照した。

(ア)土屋重朗『静岡県の歴史と医家伝』一八四―一八七頁、戸田書店、昭和四八年

（イ）戸塚芳男「戸塚家の家系」『蘭学資料研究会研究報告』二一三号、一―一〇頁、一九六八年
（ウ）戸塚芳男「戸塚家の人々――文海・静甫・柳渓・艮斎」『蘭学資料研究会研究報告』二四四号、一〇―一六頁、一九七一年

(48)『公文類纂』明治五年、巻一、三一六丁
(49)「海舟日記」『勝海舟全集』一九巻、三七五頁、勁草書房、一九七三年
(50)「海舟日記」前掲書、四一三頁、四九五頁、四九七頁、五〇五頁、五〇六頁
(51)『官員録』明治九年、西村組出版局、寺岡寿一編『明治初年の官員録・職員録』三巻、寺岡書洞、昭和五二年
(52)壁島爲造、前掲書、二八頁
(53)『講筵筆記』例言　海軍病院官版、島村屋、明治四年
(54)壁島爲造、前掲書、三五三頁
(55)高木兼寛修了証書、東京慈恵会医科大学蔵
(56)東京医家雷名鏡、東花堂、明治一八年、順天堂大学医学部山崎文庫蔵
(57)黒沢嘉幸先生私信
(58)明治八年一〇月芝白金の海軍共同墓地に、海軍軍医部に関係をもつ一六一名の拠金によって墓碑一基と灯籠五基が建立された。
(59)明治二六年八月に鹿児島市城山公園内に建立され、現在は鹿児島大学構内に移築されている。
(60)奥山虎章は奥山虎炳の弟にあたり、弘化四年（一八四七）に生まれ、海軍大軍医になる。明治二〇年（一八八七）四月一六日、四一歳で死亡した。
奥山虎章については「三人の玄良と一人の虎章」と題して、日本医史学会例会（一九九五年四月二二日）で報告した。この抄録は『日本医史学雑誌』四一巻三号四三六―四三七頁に収載されている。いずれ原著として発表の予定である。
(61)明治一一年の増訂第二版にのる「増訂医語類聚引」は、著者奥山虎章自身の名になっている。

（順天堂大学医学部医史学研究室）

Dr. Toraakira Okuyama, a Higher Medical Officer of the Japanese Navy in Meiji Era

by Yasuaki FUKASE

Toraakira Okuyama was born in Nagasaki in 1840. His father, Genchu Okuyama, was the Dutch learning doctor of the Kaminoyama clan and one of the founders of the Otamagaike Vaccination Center.

During Tokugawa period T. Okuyama, who had a title "Gensei", was appointed as medical officer in the infantry regiments in 1863 and then was promoted to vice-director.

He was appointed as doctor of the national hospital (Daibyoin, 大病院) and then as assistant professor in the new epoch of Meiji was transferred to become a naval medical officer in 1871. He was advanced to Dai-ikan 大医監, the highest rank of medical officer in the Japanese navy.

He worked for the establishment of naval medical systematization and gave students education at the naval medical school (Kaigun-Guni-Ryo-Gakusha 海軍軍医寮学舎) with William Anderson and Edwin Wheeler.

He resigned his post in 1876 and died in 1926, until which time he continued the life of a practitioner.